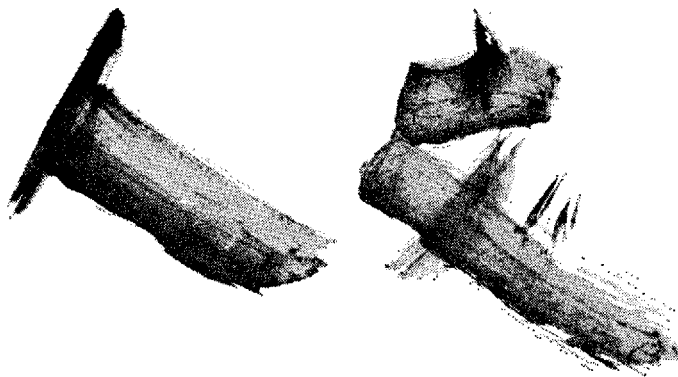


Title	人文 第20号
Author(s)	
Citation	人文 (1979), 20: 1-35
Issue Date	1979-09-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/57146">http://hdl.handle.net/2433/57146</a>
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

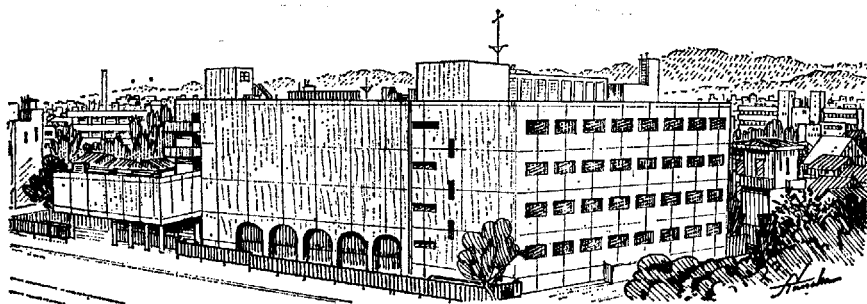


第 二 〇 号



1 9 7 9

京都大学人文科学研究所



## 人 文 第二〇号

1978年12月——1979年5月

### も く じ

随想	2
西と東	福永 光司
神山茂夫所蔵史料の整理を終えて	渡部 徹
古代メソポタミアのロバとオナゲル	前川 和也
講演	7
開所記念講演	
内縁配偶者の法的地位	太田 武男
宋代知識人の虚像と実像	梅原 郁
十九世紀イギリスの科学方法論	内井 惣七
退官記念講演	
日本人とルネサンス	会田 雄次
本のうわさ	13
山田慶兄『朱子の自然学』（谷・多田道太郎『風俗学』（上田・吉田光邦『両洋の眼』（横山	
共同研究の話題	17
伝承・推論・史料	飛鳥井雅道
「人民文学」の短篇小説評選	深沢 一幸
都市の社会学	田中 峰雄
旅	21
ザ・ミカド、あるいはティティブの町（横山・ヴァチカン図書館のこと（川勝）・夜行バス二十時間（園田）・冬の北京（竹内）・蘭州の印象（梅原）・入蜀雜感（狭間）	
書いたもの一覧（一九七八年二月—一九七九年五月）	
人のうごき（1235）・お客さま（20）・おくりもの（28）	30

## 西と東

福 永 光 司

京都の地は東京に対しては西であるが、九州に対しては東である。同様にして東京の地は京都に対しては東であるが、北海道に対しては西である。だから東とか西とかいっても、その区別は相対的なものでしかなく、あまりむきになるほどの問題ではない、といった議論を昔なにかの本で読んで成る程と思った記憶がある。

とはいふものの現実に京都の地から東京の地に五年間ほど移り住んでみると、やはり西の京都と東の東京とはいろいろな点でかなり違うなという生活の実感を抱かざるを得なかった。

わたくしが九州の片田舎から出てきて京都の地に初めて住んだ学生の頃、この古都に対して抱いた素朴な感想は、“公卿と僧侶の町”ではないかということだった。広大な敷地を

もつ宮廷御所があり、御所のありようにかたどった平安神宮があり、町にひしめく大小無数の堂塔伽藍が、田舎の城下町に育った農民の子のわたくしには、やんごとなくお上品で、ひどく優雅なものに感じられた。

その京都の町から東京の町に初めて移り住んでみて、わたくしのこの日本の首都の町に対して抱いた最初の印象は、“將軍と武家の町”ではないかということだった。江戸城趾の莊大な連なりをもつ石垣や霞ヶ関のそこかしこに屯する警視庁のつわものたちの姿が、赤げつとこのわたくしに威圧的で近寄りがたいものを荒々しく感じさせたからであらうか。わたくしの勤めた大学からして、封建大名の造った朱塗りの門がそのままに用いられており、巨大な石柱に囲まれた校舎のアーケードは、さながらヨーロッパ中世の城塞の観を呈



していた。

わたくしが研究者の末席を占めている中国の学問では、学者の気風もしくは学風を特定の地域すなわち地理的風土的な条件と結びつけて特徴づけることがしばしば行なわれる。たとえば程伊川の学問を洛学とよび、蘇東坡の学問を蜀学とよぶが如くである。

そして九州の農民の子であるわたくしの上述したような感想・印象が、もしもなほどうかの真实性をもちうるとするならば、東京の大学と京都の大学のいわゆる学風もしくは学

者の気風にもまたかなりの違いが指摘されるのではなからうか。その違いが具体的にどのようなものであるのか、今のわたくしには事柄が余りにもなまなましすぎて、とても論点の整理された文章など書けそうにもない。ただし、五年の歳月を東京の地で過したのち、再び京都の地に舞い戻ってきて、切実に感じるのは、この町がやはり「公卿と僧侶の町」ではないかという、かつてわたくしの感じた特徴を全く失っていないということである（五四、六、二三）。

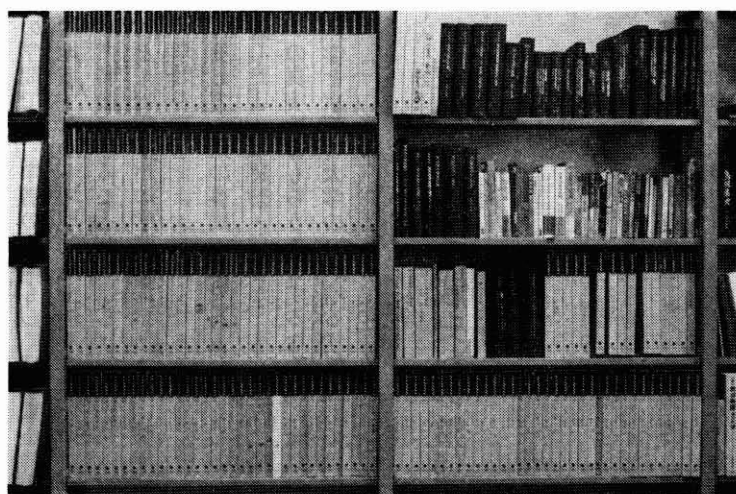
## 神山茂夫所蔵史料の整理を終えて

渡 部 徹

戦前・戦後の共産主義運動のユニークな指導者であった神山茂夫（一九〇五—七四・七八）の自宅に残された著作物・図書・資料の扱いについて、ハナ未亡人に、この研究所に

寄贈し、私が整理した上、永く保存し広く閲覧に供してほしいとの希望があるが、承諾してもらえるかと、栗原幸夫君から打診を受けたのは、故人の三周年の墓前祭の直前であっ





た。

神山茂夫とは、戦後間もなくの四六年にはじめて会って以来、いわゆる神山理論の支持者として、また日本共産党の五〇年分裂から五年の六全協後しばらくまでは同じ戦列の同志であった。その後、彼が党幹部に復帰した時期を隔て、六四年の除名以後は、かつて神山派といわれた人びとの多くが離反し、身辺が寂しくなったからであろう、なつかしがつて、彼からの連絡で会う機会が多かった。

そして死の年の七四年には、彼の強い希望もあって、私の研究班の仕事として、彼から徹底的な聞き取りをすることになり、一月七日から比叡山ホテルに三泊四日缶詰めにする手筈をととのえ、彼も我々も準備万端ととのえたのであったが、その前日の一月六日緊急入院して来なくなり、中止するという残念なこともあったという因縁があり、また常々、資料のことは渡部君がいるからと頼りにしてくれていた関係上、故人への義務めいた気持ちもあって引受けたしだいである。

それより七七年七月一二日、七八年一月二



六日、三月一日、六月一八日の四度、神山宅に伺い、ハナ未亡人の指示に従い、文字通り家探がしし、戦前の特高そのけに、必要な図書・著作物は勿論、臭いと思われる書類袋・紙包みをすっかりいただいた。

押収？したまではよかったが、さて整理が大変である。とくに書類袋・紙包みは厄介であった。研究班の数人の方に手伝ってもらったが、材料に使ったと思われる新聞の束の中からわずかのメモ、未完の断片の原稿を取出

し、またメモ魔といわれただけに、会議のメモなど、しかも日付はあっても年の記入のないのが大部分、二応、年次別に整理はしたが、誤りも避けられなかった。

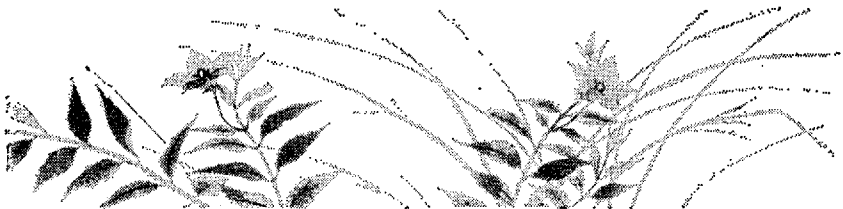
整理は、単行本を除いては、スクラップ・ブックに貼付したが、スクラップ・ブックだけで一五〇冊をこえた。未発表の貴重な史料も少なくないので、保管の万全と同時に、研究者の利用を期待したい。(写真は整理された著作物と神山宛書簡、資料類)

## 古代メソポタミアのロバとオナゲル

前 川 和 也

前三千年紀中頃のシュメール・ウル王墓から出土した《旗章》<sup>フラグメント</sup>には、四頭のウマ科動物にひかれた戦車が描かれている。発掘者ウーリーはこの動物をオナゲルだと考え、かなりの学者がこれに従っているが、反対意見も多

い。現在オナゲルは家畜として用いられていないから、一部の学者は「かつて家畜化された動物はすべて現在も家畜として利用されている」という原則をもちだして、ウーリー説に反対する。そしてシュメール語でオナゲル



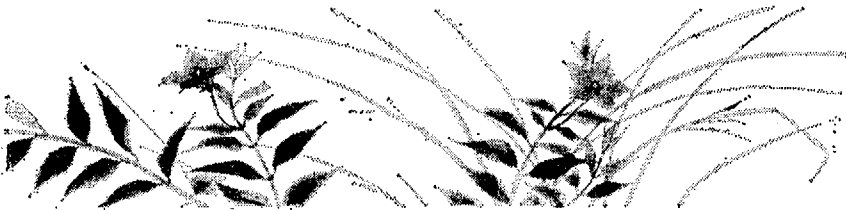
を指す語はいまだ確定されていない。

さて、初期王朝期末ラガシュ文書から、ウマ科動物—シュメールでは *anse* と総称された—の管理のしくみがわかる。それによると、もっとも普通にみられる *anse* は *ANSE. DUN. GI* および *ANSE. BAR. X. AN* であった。前者はオスだけが犁耕に用いられた。いったばうオス *ANSE. BAR. X. AN* はある種の乗物に四頭立てでつながれ、メスは犁耕に使役された。もしこのような解釈が承認され、またシュメールでは戦車はオナゲルによってひかれていたとすれば、*ANSE. BAR. X. AN*こそがオナゲルなのではなからうか。オナゲルが完全に家畜化されていたというのではない。ラガシュ文書にはまた、訓練された野生 *ANSE. BAR. X. AN* が用いられていたことを示唆する材料があるからである。人間による繁殖が困難であったからこそ、メスの畜力さえも利用されていたのではないか。

さてラガシュでは、*ANSE. DUN. GI*、*AN SE. BAR. X. AN* とは区別されて *anse* と呼ば

れる動物は存在しない。つまり、*anse* はウマ科動物を総称する語なのであり、もしロバがいたとすれば、それは *ANSE. DUN. GI* に他ならない。のちのウル第三王朝時代に書かれた王室の動物管理記録では、主要なウマ科動物は *ANSE. LIBIR* と *ANSE. BAR. X. AN* であった。ところが他都市文書では *ANSE. LIBIR* の語は少なく、*anse* (＝ロバ) および *ANSE. BAR. X. AN* が検出される。*anse* と *ANSE. LIBIR* は同一文書にはあらわれない。すなわち、初期王朝期がおわると、ロバを示す語は *ANSE. DUN. GI* から *ANSE. LIBIR* にかわる。ウマ科動物の厳密な分類が要求されるばあいには、ロバは *ANSE. LIBIR* と書かれるが、いったばうで *anse* によってロバが指示されることもふえてきたのである。

これまでシュメール学者は、もっぱら *anse* をロバと訳し、*ANSE. DUN. GI* あるいは *ANSE. LIBIR* がロバを意味するとは考えてもみなかった。私の議論にどのような反応があるか、いま息を詰めて待っている。





## 講演



開所記念講演（昭和五十三年度）

十一月九日  
於 京大会館

### 内縁配偶者の法的地位

——その現状と今後の問題——

太田 武男

現行民法（昭和22年法律122号）は、明治民法（明治31年法律9号）の規定をほぼそのまま受けて、婚姻の成立につき届出婚主義をとっている（139条）。ここに、内縁配偶者とは、婚姻の意思をもって、夫婦共同生活を行ない、社会的には正式の夫婦と認められているに拘らず、法（現行民法139条）の定める婚姻の届出手続

を了していないために、法律的には、正式の夫婦とは認められない事実上の配偶者を指摘する。

したがって、当初内縁配偶者は、法而前のないし法外的な関係として理解されていたがゆえに、その法的地位など期するに由なき状態であった。しかし、当時の内縁配偶者達は、一日も早き届出を期待しながら、戸主や父母の同意をえられない等、自己の意に反して、ないしは法的障害のために届出が遅れ、そのために不利な地位に止らざるを得ない者が多かった。内縁問題が内縁保護の問題として登場してきたのはそのためであった（明治末期から大正初期）。当時の大審院が内縁関係を婚姻の予約関係として把握し、一方の不当破棄を債務不履行の法理によって救済せんと試みたのは、かくの如き時代的背景のもとにおいてであった（大正4年）が、その後、内縁関係は準婚姻関係であると把握し、それに準婚的保護を附与せんとする学説が台頭し（昭和8年頃）、再来、その準婚的取扱は強化の一途をたどり、民法の定める婚姻効果のうち、届出を前提とする効果は認められないが、夫婦としての共同生活の存在を前提として認められていると解し得る効果は、内縁配偶者にも認めらるべく、その不当破棄に対する救済も、不法行為理論によるべきであるとの見解が有力になり、また一方では、相続権をも認める

べきではないかとの主張もなされ、昨今では、相続人不存在の場合に限ってはあが、その方向に向っている（昭和37年以降）。そして、右の内縁保護傾向は、戦後の個人の尊厳と両性の平等の理想実現の思想的背景のもと、いわゆる「重婚的内縁の配偶者」にまで及び、重婚的内縁配偶者でさえ通常の内縁配偶者と同程度の準婚的效果が附与される段階にまで達している。

しかしながら、戦後は、戦前と事情は異なり、婚姻の届出を阻止していた要因の一つと考えられていた、さきに述べた戸主の同意や父母の同意に関する規定も、廃止あるいは緩和され、当事者は、成年で、本人の意思さえあれば、誰の制約を受けることもなく届出手続をとることも可能であるのみならず、法務当局においても、早期届出を奨励して、日曜・祝祭日等の休日届出さえ認めるに至っている現段階である。それゆえ、戦前の旧法下と同様、内縁配偶者を保護すること、特にその保護を強化することによだけの意義ないし必要性があるかはすこぶる疑わしい。「内縁保護再検討の問題」が云為されかけているのもそのためである。だから、わたくしは、右の現状をふまえた上で、その対策を考慮すべき時期に立ち至っているのではないかと考える。そして、その解決策としては、① 第一に、現行民法の届出婚主義の建前を周知せしめ、婚姻届出

についての一般国民の知識を高め婚姻生活における届出の意義と必要性を理解せしめた上、即日届出を奨励し、内縁配偶関係の発生を未然に極力防止し、② 第二には、それにも拘らず生ずることあるべき内縁配偶者についてはその保護基準を厳格にし、効果附与の慎重を期することが望ましいのではないかと考えている。だから、届出の勵行策もさることながら、その保護基準の在り方ないしその保護基準自体を如何に設定するかが、われわれ家族法学者に課せられた今後の重要な課題ではないかと考えている。

## 宋代知識人の虚像と実像

梅原 郁

中国の科学史を語る時、北宋の沈括の名をはずすことはできない。特に最近、科学重視の政治状況に伴って、中国では彼とその著『夢溪筆談』に対する関心がひととき高まっている。

『夢溪筆談』は六百条余りの随筆割記だが、その三分の一が科学的記述で占められ、磁針の偏角、石油、化石、鋼鉄をはじめ有名な畢昇の陶活字など、この書

物が最初に記述したり、或はこの書物だけにしか見えぬ記事を数多く含んでいる。このほか、天文学、数学、医薬、音楽など広い分野に亘って沈括は蘊蓄を傾け、このため、科学史家として高い評価を与えられているわけだが、科学史家としてだけ彼をとらえるのは、必ずしも適當ではないと考えられる。

下級地方官を父に持ち、幼少の頃から父の任地だった江南地方をめぐり、その死後、恩蔭によつて自らも地方官のポストを得る。それは、科擧出身のエリートでは味わえぬ、繁忙な実務政治に明け暮れる生活であつた。ほぼ十年に及ぶこの下積み時代の多くの見聞と経験が、『夢溪筆談』の一つの柱となつている。並々ならぬ辛苦の結果、彼は官員のまま科擧に挑戦し、優秀な成績で合格する。ここから彼の陽のあたる生活が始まる。

最初しばらく、宮廷図書館、国立天文台で天文、曆学に専念し、士大夫としてはその方面の第一人者になつたのち、折しもはじまつた王安石の改革に有力メンバーとして加わる。四十代の前半は、新法のための地方巡察、契丹との外交交渉、軍備、財政問題など、政治家として彼は油の乗った活躍をした。その中にあつて、彼は常にこれまでの人たちがあまり関心を示さず、また価値を認めなかつた事柄をとりあげ、それに

適確な意味づけを行い続けた。

王安石下野ののち、沈括は大蔵大臣にまで進んだが、やがて起つた西夏との衝突を解決すべく、陝西の延安に赴き、不幸それに失敗する。責を一身に負わされた彼は、晩年十年を江南に隠棲し、『筆談』を書き綴ることになる。

十一世紀の中国は、唐宋の巨大な変革の総決算ともいうべき時期であつた。時代の最先端を掴んで改革を進めたのが王安石を中心とした、江南の新興官僚群であり、沈括もまたその一員に他ならなかつた。彼は今日でいう科学者であるより以上に、当時の合理主義進歩性を実際に身につけた文人実務官僚として位置づけられうるであろう。その多種多様な対象への興味とあくなき探究心は、北宋時代中国の進歩した側面の産物といふことができる。

## 十九世紀イギリスの科学方法論

内 井 惣 七

十九世紀のイギリスは、科学史および科学哲学の観点からみて、きわめて興味深い状況を呈している。

まず第一に、いわゆる古典的科学的の充実した知識をふまえたうえでの、科学の哲学および科学方法論が出現する。知識の本性を分析し、その妥当性の根拠を検討する試みは、「認識論」という哲学の分野として、もちろん古代から存在する。しかし、近代科学の具体的な諸成果に即し、科学的知識の本性と方法を体系的に論じた著作は、十九世紀のイギリスで初めて出現したのである。その代表的なものは、ジョン・ハーシェルの『自然哲学研究に関する予備的考察』（一八三〇）、ウィリアム・ヒューウェルの『帰納的諸科学の哲学』（一八四〇）、J・S・ミルの『論理学の一体系』（一八四三）などである。

第二に、これらの科学哲学および方法論が、多様な傾向にわたることである。たとえば、ハーシェルとミルは、英国哲学伝統の経験論の立場に立ち、知識の妥当性の根拠を経験に求める。これに対し、ヒューウェルはカントの先験論哲学に強く影響され、理念や概念こそ知識の妥当性の源だとする。さらに、これら二つのいずれとも異なる新しい方法論が、確率論および統計学の発展を背景に出現する。その主たる推進者たちは、デ・モーガン、W・S・ジェヴォンズらの記号論理学の創始者であった。この立場での代表的著作は、ジェヴォンズの『科学の諸原理』（一八七四）である。

その特徴は、科学的知識が確実だということを否定し、多かれ少なかれ蓋然性（確率）を伴う仮説にすぎないとみなす点にある。

第三に、十九世紀中頃が、科学観の重要な転換期とみなせることである。象徴的な出来事はダーウィンの『種の起源』の出版（一八五九）である。進化論が宗教的な理由から敵対視されたことはよく知られている。しかし、当時の科学者たちの反応の多くが、ダーウィンの仮説が「帰納的」ではないという理由からの反対であったということは、それほどよく知られていない。「帰納」は十九世紀の科学方法論における一つのキー・ワードであるが、その内容の変遷のうちに、実は科学観の転換が読みとれるのである。すなわち、ハーシェルやヒューウェルらの科学観によれば、科学的知識とは十分確実な証明の与えられたものである。ところが、確率を帰納の中心におくジェヴォンズらの科学観によれば、そのような証明など不可能で、科学的仮説はつねに何がしかの不確実性を伴う。

この講演では、これらの科学方法論の歴史的背景、特徴と、それらの背後にある科学観をかんたんに解説し、今世紀前半の科学方法論とのつながりなども少し示唆してみた。

## 退官記念講演

五四年三月一五日  
於 京大 会館

## 日本人とルネサンス

会 田 雄 次

ルネサンス、とりわけその本場であつたイタリアのこの時代に対するとき誰でも理解に苦しむ現象がある。それも末梢的なものならよいが、基本的な社会現象だから弱るのだ。

たしかに文化は繁栄している。美術方面においては異常とも思えるほどだ。例えばフィレンツェである。その盛期十五世紀の人口は六万から多く見て十万前後に過ぎない。支配農村地域を入れると百万人位になるうか。その大都市に、ジョットーからはじまり、ドナテロ、ボッティチェリを経てミケランジェロに至るまで数え切れぬほどの巨匠を輩出させている。明治以来同じ百年間の日本の、すべてを挙げて生んだ画家や彫

刻家の中で、五百年後、世界歴史の中にその名が残り、無数の人々の心を魅惑しつづけ得るような人が何人いることだろう。それを考えると、歴史条件が違ふとはいえ、ルネサンスの文化の隆盛は、やはり、異常といつてもよいと思われる。

だが、その社会である。確かに東方貿易の隆盛や毛織物工業の発達はある。けれどもその一方、私たちがいだいている平和、秩序、人々の相互協力、道義の堅固さ、すぐれた宗教の支配と精神の安定といった「文化生産の条件」は全くといってよいほど欠けているのだ。毎日のような戦争と内乱。政治家はみにくい限りの権力争いをくりかえし、派閥の争い、権力者の刺殺、毒殺が続く。汚職といった観念はそのころないからすべてが汚職そのもので、金が何より物をいう世界でもある。「この世では人の命より安く買えるものはない」。たとえ嘘でも人間一人の生命は地球よりも重いなどと政治家が云える今日の日本とは正反対の世界であつた。

そのような、すべての人が明日をも知れぬ毎日を送らねばならぬ時代にどうしてこれほど優れた文芸が展開したのだろうか。それが利根的な享楽や美への陶醉をうたつた文芸ばかりでない。深い静かな信仰や熱烈な信仰をこの上なく見事に表現した芸術も、また無数

に作られているのである。

この問題は欧米学者先生たちも困ったと見え、元祖のブルクハルト以来多くの人がいろいろ考えている。しかし、そのすべては、人間性の善と信仰心を絶対的とした綺麗ごとの解釈である。東方絶海の島の私たちから見れば、いい気なものだという外はない。私のルネサンス研究は結局のところ、この阿修羅の世界と、

信仰と芸術とが、どこで、どのように、矛盾なく結合しているか、単に結合しているだけでなく、相互に刺戟、助成し合っているかを考えることに明け暮れて来たといつてよい。つまり「死物狂い」の世界の分析考察である。その一応の結論が女子供のごっこ遊びのような現在の日本と世界への私の発言ともなっているのだといえないこともない。

### 人のうごき

○多田道太郎教授（西洋部）は、五四年一月六日成田発、アイルランドのコーク近郊、ロンドン市内、アメリカ合衆国のナッペンビル市内、パリ近郊で生活文化調査を終え、二月五日帰国。

○梅原 郁助教授（東方部）は、五四年一月八日成田発故宮・甘肅省・山西省博物館等で、文化教育機関視察調査を終え、同月二二日帰国。

○竹内 実教授（東方部）は、五四年一月一五日成田発、中国科学院教育部、复旦大学等で、学術事情調査を終え、同月二六日帰国。

○伊佐憲治事務長は医学部に配置換え、後任事務長に丸田義雄氏（経済研究所）が（五四年一月一六日付）。

○園田英弘助手（日本部）は、五四年三月一日伊丹発、ジャカルタ博物館、インド

ネシア大学、シンガポール国立博物館等で外国文化の影響に関する村落調査を終え、同月二八日帰国。

○茂木信之助手（東方部）は新潟大学講師（教養部）に昇任（五四年三月一六日）。

○山田慶児教授（東方部）は、五四年三月一七日成田発、南京・武漢・西安大学等で、科学史に関する資料収集を終え、四月三日帰国。

○狭間直樹・吉川忠夫助教授、深沢一幸助手（東方部）は、中国文学研究者訪中団員として五四年三月三〇日伊丹発、北京大学文学研究所、龍門の白馬寺、四川大学等で中国文学研究調査を終え、四月一八日帰国。

○竹内 実教授（東方部）は、五四年三月三〇日伊丹発、台北の国史館で中国現代史に関する研究を終え、同年四月九日帰

国。

○森 時彦助手（東方部）は、五四年三月三〇日成田発、四川大学の招聘により、中国の歴史、文化研究の為、一年間滞在し、五五年三月三一日帰国予定。

○内井惣七助手（西洋部）は辞任の上、大阪市立大学講師（文学部）に転出（三月三一日）。

○桑山正進氏（京都市立芸術大学助教授）を助教授（東方部）に採用。

○羽賀祥二氏を助手（日本部）に採用。

○杉山正明氏を助手（東方部）に採用。

○富谷 至氏を助手（東方部）に採用。

○副島國昭助手（日本部）は、和歌山大学講師（教育学部）に昇任。

○夫馬 進助手（東方部）は、富山大学講師（人文学部）に昇任。

（以下、三五ページ）

## 本のうわさ

### 山田慶児 『朱子の自然学』

(B6判、四七五頁、岩波書店)



朱子は、宇宙論を体系的に叙述した文章を残さなかった。いや中国の思想家たちは、必要をこえては、思想を今日の意味で体系的に言表化しなかった、と山田さんははじめの部分で書いている。たしかに体系的に宇宙観を言表化しなくとも、背後に体系が蔽としてある例は少なくない。ところで中国のこのような思想家のばあい、基本的な存在の諸概念および作用、その他のパターンが決定でき、さまざまな存在の領域における事物の行動様式の典型的パターンを示しうるならば実践のために十分であって、演繹の体系を必要としなかった。すくなくとも自然学にかんするかぎり、存在の諸概念の自然史的展開過程として体系を構想し

ても、それが言表化されるとき演繹の体系としてでなく、もろもろのパターンの表示にとどめた。それが中国の思想的風土であり、宋の哲学者もまた望むところであったという。こういう記述にぶつかって、わたしは、かつて山田さんが、旧著『混沌の海』の中で、ユークリッドの幾何原本が、中国で、定義、公理、定理の区別ない、のっぺらぼうの実用幾何学書に翻案されてしまったという話を書いていたのをおもひ出した。知の伝達、それには教育も含まれるが、こういう社会的営為は、いずこの社会にもある。ただその伝承の方法には種々あり、知の形式にも制約されている。知の伝達のために、なにも演繹的形で言表化されて

なくとも、ある範型を、言語のみならず非言語的手段で示すことで、より適切に伝達されることもある。思想も一つの文化の歴史的發展であり、総合的知の体系的伝達の試みとみなすとき、中国的思想のかかる表現上の特徴は、中国的知の伝達法の一部として、どういう意味をもつか。教育の問題をも含めて興味をもった。

もちろんこういう感想は、本書の意図と無関係の所でもたれた感想で、山田さんの格斗は、こういう形で表現された朱子語録の背後にある体系的構想をいかに再現するかにあった。ただ知の表現形式はどうせん、知の内容そのものともかわっている。理はパターンを意味する。パターンとは物質やエネルギーのなんらかの規則的配列、秩序だった配列である。それを模様といい、パターンといい、構造という、その適否はとも角、秩序化の形式の意といえよう。われわれは、繰り返される形式であるゆえに知覚できる単位というものを眼前にみる。ところでこういう単位は、物の秩序化であるがゆえに、物を媒体とし、その知覚を通じて、パターンを知る。パターンをもつのは気候の年周期や波動だけではない。自然現

象のみか、われわれの社会的産物、行動の様式内にもある。行動は秩序づけ、コード化されてはじめて意味を伝える。しかもたとえ人間の行動のコードと、物的表象の時間的空間的配列を通じてしか存在の仕様がでない。言語の音声にしてそうなのだ。理は氣にのっているという言葉は、こういうことを云っているのだろうか。氣とはまさにパターンにのられている物的媒体についての学と理解すればよいのか。

とするとヨーロッパの意味での形而上、形而下とは異なる二元対立がそこにある。かかる氣、それを自然的世界を構成する物質的基体、それは、一氣、陰陽、五行というカテゴリーによって把握される。山田さんの本書での仕事は、こういうカテゴリーをもって、自然的世界を生成論的視角から合理論的立場で語りつくそうとした、朱子の壮大な構想を再構成しようとしたものと云えよう。

宇宙論、天文学、気象学という章分けのもとになされた山田さんの苦斗の跡について、その解釈の正否を論ずる能力はわたしにはない。科学史家として、そして思想史家として、この再構成は当然なざるべきこ

とではあるにしても、その混沌をかきわけ、われわれに理解可能な形で、その構想を示そうとしたその念力に、わたしは圧倒された。もちろんだからといって、その全てがわかったというのではない。読む側としての力量不足は認めざるをえなかった。

ただ、わたしにとつてもう少し知りたかったことは、パターン認識といわれているものの内容である。パターンがあるところにはかならず数がある。「この理があればこの氣があり、この氣があればこの数がある」数はパターンの特性であるという。もちろん易のような二進法的表現で、たしかにパターンは示差的に記号化できるかもしれ

れない。しかし示差的特徴の内容は、二進法的指示の組では捨象される。陰陽の対立の組では、パターンの定差は十分とはならない。五行といった諸々の下位概念は示されても、この要請には十分に応じきれまい。それにしても、理はパターンだと云ったあと、具体的な形式として、いかなるパターンが朱子では示されていたのか。これは、あけひろげの氣、陰陽、五行というカテゴリーによる合理論に対して問うべきでない問いなのかも知れないが、こういうあたりについてもう少し知りたいところであった。

(谷 泰)

### 多田道太郎 『風俗学』

(B6判、二六八頁、筑摩書房)

わたしは、去年春、多田さんから「現代風俗研究会」の機関誌に寄稿をたのまれたことがある。題は「流行とはなにか」ということであつた。三カ月ばかり悪戦苦闘して、ようやく一文を草した。そのさいごを、

わたしはつぎのように結んだ。「流行は、古典的理念や、絶対的価値観のない日本人の、永遠の心かもしれないのである」と。そうして、はからずも、今回多田さんの近著である本書を手にして、そのなかにお



なじようなコンテクストを発見し、わが意をえた。たとえば、本書の二三頁で、多田さんはつぎのようにいう。「あるときインドの経済学者が私の顔をまじまじと見てこう云った。インドや中国には思想の核（コア）ともいうべきものがある。たとえば形而上学とか儒教とか。日本には何があるのかね、日本のコアは何かね、と問う。私は答えた。コアが主で表層が従という考えは、今の思想としてまちがっている。コアによって世界を統一するという時代は過ぎた。地球の表層にある各種の人びとが自立しはじめるのであれば、表層こそ『核心』である。日本では強大な権力集中が比較的弱かったために、核心無視の表層文化が、文明世界のなかではわりあい生きつづけたほうである。日本に「コア」のないことが、日本——とくに日本文化の希望である、と。」

その表層——たとえば身辺の事物——の意味づけは、じつは自分の意味づけなのである、と多田さんはいう。身辺にあるものもろの事物をとおして、そのむこうにみえるものは、やはり「自分」なのである。その「自分」を、多田さんは、C・G・ユングのいう「アニマ」の概念によって説明す

る。たとえば「男性における抑圧された女性的特性」（ユング）のように、アニマは、たんに個人の無意識の世界にひそむパーソナリティではなく、ひとつの心的葛藤なのである。たとえば、ミニスカートについては多田さんの考察は、「性は聖であり、聖なるものを決定的に暴露しようという心持と、どこかで覆おうとする心持の葛藤として短いスカート丈はあり、ミニは前者の極限までの（今のところ）勝利として、街並みを闊歩していた」とみる。

ブルベッドをもちこみ、わがものたちがアルバイトでえた金をインベダーに投資するというのは、機能性や経済性の論理では説明がつかない。現代科学の解明しおよばぬ世界である。南米のインディオの鼻つく嗅いも、日本人のみそ汁によせる郷愁も、西欧人のくさったチーズへの愛好も、そういうフーリングをすべて切りすてて成立した現代科学であつてみれば、やむをえない。

新しい学問としての風俗学の発展に期待したいところである。（上田篤）

### 吉田光邦 『両洋の眼——幕末明治の文化接触——』

（B6版、二一六頁、朝日新聞社）

わたくしが著者に会って間もないころ、ひとつのことが印象にのこった。どこかへもの、をみにゆくとき、著者はかならず巻尺を袖中にされ、めざすものに近づくと、それが壺であれ屋敷であれ、やおらその尺でチョイチョイと寸法をとられるのである。すると不思議や、もののほうから、その細

かに目盛の入ったしなやかな金属片に、すいよせられるように寄りそってきて、ほんの一瞬、なまめくのである。この儀式のあと、著者が発せられるつぶやきは、きまつて、「ヤハリ」のひとつことであつた。

ひとがその眼でとらえた像にいかなる意味をあたえるかということは、現実には反

省なく繰返されている、もの、ことばとのかなり硬質な対応関係にささえられていて、ほとんど問題とはならない。この対応関係の網の目が文化とよばれているものの本質であろうが、理屈のうえでは無限に可能な意味づけのいとなみが、実際には、かくも限られていることこそ奇怪なりと考えだしたとたん、ものをみる行為はとほうもない危険にさらされるのである。

おそらく著者は、そのおそろしさに絶えずおののく人ではないだろうか。わたくしは、著者が巻尺をあちこちにふりかざされるのを見て、古代の神官が幣をかしこみうちふった姿もかくやと想像したものである。尺という単純明快な準器をもちいて、ふりかかる奇異千万の意味の渾沌に、あえて秩序をあたえんとされるのである。そのばあい、準器の簡明さこそが、ものと眼の間にはらまれた恐怖の深淵を、その恐怖をけすことなく強靱にはしわたしする手段として、絶妙なのであらう。

このあたらしい著書のなかに、延べにしいったい幾百千の人物が登場するのであらうか。このような数の人びとをさらりと筆上につなぎとめ、素人を一驚させ玄人を

唸らせる手際をみて、やはり著者との研究対象の間には簡明な準器が介在するのだと思われるのである。この本は、一種独特の均質化をとげさせられた一九世紀の人間のある。それぞれが、どんな色で、どの方向をむいていて、どの程度おたがいに違っているか、とみるかは、読書子の自由であるが、ここに登場する人びとは一人として英雄視もされず、またとくに卑小にも扱われていない。ひとつひとつ適度の標本箱におさまって、まとまりのよい四つの棚・章に配列しうろほどに、著者の準器の下に鎮まっている。

ほんとうは「眼」ばかりは、収集するにはたいそう危険なしろもので、あつめるうちに、自然、じぶんの「眼」もえぐり出しておさまりのつかぬ態にならべてしまう羽目になるという、きわものなのであるが、著者にかかると、「ヤハリ、ヤハリ」ですんでしまうのである。これは、もともとこの書が新聞連載の短文を中心にまとめたものという理由からではないように思われる。わたくしは、ふと夏の夜店にかかる走馬燈をみる思いがした。めまぐるしく輝きはし

り去る絵は、美しいというより、はかなく悲しいのである。それにしても、畠中光享氏のさし画との調和の妙は気味がわるい。

一九世紀後半の技術革新は、日本の鎖国をおわらせ、地球上の西と東を不自然なスケールとスピードで引き会わせ、膨大な数の人びとがみなれぬものをみることを否定なくせまられ、だれもがアイデンティティのたえざる修正にひたすらかかわらなくてはならない「現代」がはじまったのであるが、いま百年あまり経て、はやこのような現代史が書かれたことに、いささか慨嘆しつつ、それが著者のような、ものを殺さぬコレクターによってなされたことに、安堵しもするのである。J・M・W・シルバーのリトグラフの「寂しい」「透明な」色調の説明のなかに、著者みずからの「眼」が陳列されているとみるのは、わたくしもこの紙面に自分の「眼」をつけ加えることと相成哉。

(横山俊夫)

伝承・推論・史料

——国民文化の成立研究班——

近代史研究でしばしばおこなわれがちな研究手続きのあいまいさに、最近わたしは自戒せざるをえない。次のような情況が小説の形で書かれたとしよう。一昨年までのわたしなら、大笑いしたであろう。「小説家は気楽でいいなあ」と。

明治八年某月。(1) 西郷隆盛が鹿児島にひきこもって「県」は事実上独立国化し、一触即発の形勢にある。(2) 旧国父の島津久光は東京にいやいやながらひきだされ左大臣の要職につきながら、廃藩置県以来のうさを酒ではらしている。(3) 薩摩出身の海江田信義は「欧化主義者」大村益次郎の暗殺に成功したものの、時代の流れをとどめられず、久光に接近している。(4) 勝海舟は旧幕府の人間としては西郷隆盛と心を許した唯一の人でありながら、元老院議官をつとめつつ、「過激の者」を自宅によんでは、江戸弁で不満をまくしたてている。(5) その聞手の常連にフランス帰りの元老院権小書記官・中江

篤助がいて、(6) 写本の「民約論」に自宅で朱を入れたつあったが、(7) さて、ある日、政府転覆計画の案を執筆し、久光への紹介状を書いてほしいと海州にさした。(8) 海舟はその内容も海江田信義の過去をもちりながら篤助を海江田信義ルートで久光に会わせる。(9) 篤助は久光に、今、西郷隆盛と勝海舟が手をくんだら、大久保利通の政府などは一氣にひっくりかえせると説く。(10) 久光は心動くものの、話を具体化することができずにいらだつ。(11) 篤助はこりずに何人かを集めては計画を続けている。ちよつと困るな、とためらった海舟は、篤助に結婚話を持ちこんだり、「あんまり無理な話はあるもんじゃネエヨ」となだめたりしつつ、金を借しつつける。……

こんな話は奇妙である。東洋のルソー・中江兆民にわたる近代史家の常識は、これはウソと判定することになっていた。だが、(1)から(4)までは常識としても、(5)以下、とくに(11)にまでなると、ウソにきまっていた。だが、証明は略するが、(5)以下が勝部真長、稲田正次、松永昌三氏らによる文書の公刊や発見によって確認されたのである。この事実と、さらに篤助がフランス時代に政府高官たる井上毅と接触していたこと等々を明らかにした井田進也氏の一連の仕事とくみあわせると、兆民像のみならず、明治初期政治思想史はすっかり書きかえを要求され

てくるのである。このとき、これに近い伝承が兆民没後、幸徳秋水によって記されていたのを、近代史家が軽視していた思考の怠慢がもっとも重要だとわたしは考える。伝承と史料がいかにかその時点で離れていても、推論を正しくたてていれば、われわれがあわてることにはなかったはずだ。これらをめぐって近代史の方法論と実証のしかたについて百枚くらい書きたいが、とりあえず自戒したいとのみ認す。

(飛鳥井雅道)

## 「人民文学」の短篇小説評選

——現代中国の政治過程と民衆の意識研究班——

わが「現代中国」研究班では、「現状分析」と題する研究会を定期的に設けている。現在の中国で発行されている各種の雑誌の内容を、班員一人が一誌というかたちで紹介し、それに基づいて全員で討論するのである。七月七日には、京大会館において、一般にも参加を求めた公開研究会を行なったが、テーマは文学関係の「現状分析」だった。私も当日は「人民文学」を担当したが、その報告をここで要約することにした。

「人民文学」七九年第四期には、「一九七八年全国優秀短篇小説評選当選作品」の発表がありました。これは、「人民文学」七八年第十期などに評選のあいさつと共に載せられた「評選意見表」を全国の読者から寄せてもらい、そこに記入された作品をもとにして、茅盾、周揚、巴金らを委員とする評選委員会が短篇二十五篇を選んだものです。記事によると、今年の二月十日までに、読者の来信は一万七百五十一、「意見表」は二万八百三十八、そして推薦された短篇は一千二百八十五篇にも達したそうです。このような「評選」じたい、四人組打倒後の中国文芸界における新しい流れに対応して企図されたものですが、選ばれた作品はいつそうそのことを示しています。

当選二十五篇は、上位の五篇とそれ以下の二十篇に大きく分けられますが、全体を通じて大部分は四人組時代（文革期も含む）にもたらされたさまざまな人間関係の破壊とその「傷痕」を描いています。たとえば当選リストの第一位たる劉心武の「班主任」は、中学校を舞台に、無気力なチンピラになってしまった少年と、一見模範生だが実は頑固な教条主義者になった少女を通して、四人組の教育破壊の後遺症を描いています。しかしまたこの作品は、それらの生徒たちをなんとか救い出そうと決意する教師を主人公として強調していますが、だからこそ

第一位に選ばれたのでしょうか。というのは、上位の五篇を見てみると、いずれも中国の将来にとって理想的人間像と呼びうる模範的人物が描かれているからです。今の中国文芸界の求めているものを、この結果は示しています。それに対して、最近の流行ともいえる若い男女の愛情をあつかった作品、たとえば祝興義の「抱玉岩」などは、リストの二十位あたりにランクされており、まだある種のためらいがあるようです。それから、「抱玉岩」もそうですが、理想的人間像の変形として、科学技術などを研究する知識人がよく取りあげられているのも注意すべきでしょう。

(深沢一幸)

## 都市の社会史

——都市の社会史研究班——

「都市の社会史」——看板の字体のよさは別として、キーワードとおぼしき「都市」とは何か、「社会史」とは何かとなれば、なかなか定義はむづかしい。いずれも術語としては語られながら、主語として了解されることはなほ少なかつた用語だからだ。

しかし共同研究の対象として都市をえらび、社会史的にアプローチする意図は、今回の研究班の結成とともに新たにうまれたものではない。前身の「前近代における社会動態」、さらにその前の「知識人層と社会」と六年間、名称も対象も方法も異なっていたが、結局は、場は主に都市にもとめられており、アプローチの仕方、法制史でも社会経済史でもない他ならぬ社会史であったと思われるからである。というよりも、その方向性は、「封建国家」班をひきついだ「異端運動」班において、すでにみえてもいた。いわば、そのような関心のあり方を、明示して表看板に掲げたのが、今回の研究テーマであるともいえる。

ところで、われわれ西洋中世都市を考えることに慣れている者は、城壁を一般にもった、人口一万、面積三〇ヘクタールぐらいの集落で、スタンダードな大都市と考えている。もっと小さい都市などいくらもあり、人口三千、面積一六ヘクタールぐらいでも、これは立派な都市である。少くとも規模の点からは、都市であることを否定されはしない。しかし面積一六ヘクタールといえば、京都大学の本部構内（一六ヘクタール強）の広さであり、当然、とくに中国史家から疑義が呈される、「そんなもん都市か」。かくして人口百万、五〇万に、都市壁の周囲四〇キロメートルという、西洋中世からみれば想像を

絶する都市像が語られることになる。しかし中国の都市も、国都をあげばある程度の規模におちつくだろうし、全面積や言語のヴァリエーションからも、中国が対応するのは西欧の一国ではなくそのすべてとみてしまえば、発生期のちがいはあるにせよ、比較はむづかしい。

問題はもつと別のところにある。都市はどのような条件をみたすとき都市と呼ばれるのか。いわば都市の存在証明だ。かくして多くのメルクマールが提起されてきた。人口、城壁、特許状、経済活動。あるいはもつと複雑に、人口集中・特殊な経済機能・複雑な社会構成・複雑な政治機構・後背地への影響、以上五点のうち、二・三の条件をみたすものが都市だと。意表をついたものとして、「托鉢修道会が修道院をたてたところが都市である」——これがなかなか有効なのだが——。いったん定義することを志向するとき、都市概念は限りなく錯綜してしまう。

しかしながら、この研究会は都市の定義を目的とも前提ともしない。主語としての都市は画定しがたくとも、ある時代、ある地域において、ある集落が「都市の様相」をもっていたか否かは、各班員の研究者としての蓄積とセンスによって十分に判断されうることである。そのような都市の社会諸集団や諸様式が、人的結合の上でどのようなであったかをみるのが、この研究会の趣旨だからだ。

となれば、キーポイントは「都市」でもなければ「社会史」でもなく、「都市の社会史」の「の」にこめた意味にあるようにわたしには思えるのだが。（田中峰雄）

お客さま

五三年一二月～五四年三月

イギリス ロンドン大学教授

スチュアート・シュラム氏

四カ月にわたり京大客員教授として滞在し、現代中国の研究に従事、東洋部現代中国班に参加されたほか、二月三日午後、京大会館で同民の報告「毛沢東の十大関係論と中国の近代化」を中心に、公開研究会をおこなった。

五月二二日

ソ連、ソ連科学院東洋学研究所

レケ・エイドリッシー

六月一二日

ネパール、トリビバン大学教授（ネパール及びアジア研究センター）

ドル・バハドル・ビスタ氏

六月一八日

米国、ウィスコンシン大学（人類学部）助教授

エミコ・オーヌキ・ティエルネイ氏

六月二七日

韓国、慶北大学校文理科大学教授 宋兢燮氏

# 旅

ザ・ミカド、あるいは

ティティプの町

横山俊夫

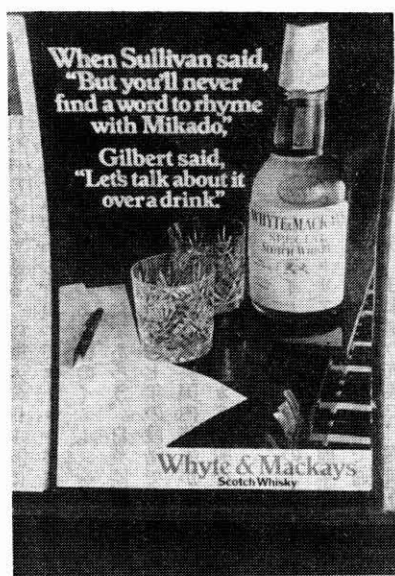
イギリスにいて不思議におもうことのひとつは、ギルバート&サリヴァンの「ザ・ミカド」が、なぜいまなお、あれほどポピュラーであるのか、ということである。一八八五年三月一四日、ロンドンのサヴォイ劇場で初演されて以来、それはほぼ一世紀にわたって、イギリスでもっとも人気ある英国製オペレッタとして君臨してきた。

A・サリヴァンの旋律のころよさや、W・S・ギルバートの単純明快な筋立てや台詞もさることながら、このプロダクションを最近まで独占してきたドイリイ・カート・カンパニーの経営の才も、そのロング・ランの理由としてみのがすことはできない。小学校から大学もふくめた各地のアマチュア・オペラ・サークルでも、「ザ・ミカド」はつねに人びとの十八番でありつつけている。

ちるなみに、ドイリイ・カートの地方巡業では、ほぼ一週間に

わたって各種のギルバート&サリヴァンものが演じられるが、初日と最終日は、たいてい「ザ・ミカド」なのである。こどもたちでにぎわう週末のマチネにも、これがかかることが多く、彼らは、「ミヤ・サマ・ミヤ・サマ・オン・シマ・ノ・マイエ・ニイ」や、「ウィロー・ティトウィロー・ティトウィロー」など、耳なれた歌詞に出あうと思わず役者たちと唱和してしまうのである。

ストーリーは、日本皇帝ミカドの皇太子ナンキルプーが、帝の命令どおりに、高貴だが醜い女性カティシャと結婚するのを嫌い、吟遊の乞食に身をやつして、ティティプという町へやってくる。そこでヤムリヤムという美しい少女と恋仲になる。ところがこの町の行政は、ただの仕立屋コロコーが、ロード・ハイ・エグゼキユーシヨナー、すなわち死刑執行長官となつたため、他の貴族がすべて抗議辞職し、太古にさかのぼる家系をはこる俗物ブーバ



ロンドン地下鉄の1 広告 '78夏

ーが、ロード・ハイ・エヴリシング・エルスとして、大蔵大臣・司法大臣・大司教・市長から野党党主までをひとりでかねていた。しかも、ヤム・リヤムはコリコーと婚約させられていたのである。

ナンキリブーは悲しみに打ちひしがれて自殺をはかるが、そこへちょうどミカド巡幸のうわさがあり、ついでにはティティブの町では最近死刑がおこなわれていない。行政怠慢ゆえ、はやばや執行すべしとの通達がある。そこでコリコーやブーバーは、ナンキリブーとヤム・リヤムの結婚をみとめるかわりに、ひと月後ナンキリブーの首をはねるという計画をたてる……………

このような設定で、悲喜こもごもの場面が展開するが、最後にはミカドの「より人間的な」思いやりで、ナンキリブーとヤム・リヤム、コリコーとカティンヤという二つのカップルが生れて、めでたし、めでたしと相成るのである。

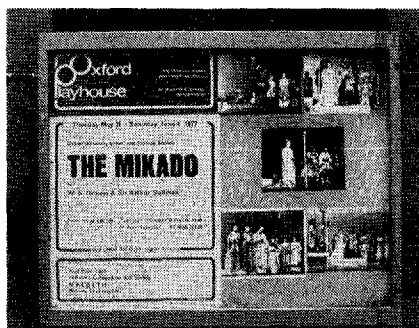
衣裳をはじめ、お辞儀、扇の使いかた、坐りかたなどは、つとめて日本風がとり入れられているものの、話の内容は、当時のイギリス社会をかなり強烈に諷刺したものとして一般に解されている。ヘザ・ミカドは、たわいもなく子供じみたオペレッタだともいわれ、その社会批判が粗野にすぎると評する人も多い。ところが逆に、文句なしに笑えてたのしめる、オペレッタ本来の要素を十二分にそなえたすぐれた作品だと絶賛するハロルド・ウィルソンのような知識人もいる。

ただ、明治中期の在英日本人の多くは、これをみて憤慨した。初演後ただちに外交筋からの抗議も出されたという。ところが、このオペレッタの人気はおどろくほどで、すぐさまアメリカに渡り、さらに世界各地の英語国で興行された。たしか横浜のゲーテ

座でも少々行われたようである。外国人の日本評にきわめて鋭敏で、しかも日の丸をみずから背負ってヨーロッパに活躍していた日本人にとっては、この日本のある種のイメージをうまく利用した喜歌劇をわらう余裕はなかったであろう。日英同盟の結束がまだきわめてかたいものであった一九〇七年の段階で、伏見宮がロンドン駐在武官として赴任したとき、英国内務省がドリイ・カートに対してロンドン市中でのヘザ・ミカドの興行を禁じたのもうなずける。

一九七七年七月三日のタイムズ紙に、つぎのような記事があった。一八八七年のヴィクトリア女王戴冠五十周年記念式典の時、ホース・ガイズを「プリンス・コマツ」が馬車で通るたびに、衛兵がクスクス笑ったという。日本側の抗議で、英国外務省が調査したところ、馬車通行

証に「ミカド」と銘がうってあったのをみて、衛兵がギルバートのヒット作を思い出し、笑いをこらえられなかった、と判明したという。ハワイ大学の友人、ジョン・ステファン氏によれば、数年前ミンガン州で日系三、四世がヘザ・ミカドの興行に抗議して劇場にピケッ



筆者出演(?)時の広告 '77初夏



トをはったとか。とにかく、このオペレッタをめぐるエピソードはつきないのである。

私は何度も各地でこの興行を見、観客の反応を見た。彼らのかには、きまつて幾人かの日本人もみられた。もちろん、見るたびにかわる自分自身の反応にも興味があつた。そうこうするうちに、こんどは舞台の側から、つまり出演者の側から観察する機会が訪れた。一九七七年の五月末から五日間、私はオックスフォード大学ギルバート&サリヴァン協会による〈ザ・ミカド〉公演にエキストラで参加することになった。場所は、リチャード・バートン、リズ・テイラーらが後援する大学附属の劇場であつた。約二週間のリハーサルと五回の本番でギルバートの「日本人」に化けている間に四キロばかりやせてしまった。もつとも、この機会に出演者がこころのうちに持っている「日本」について、さまざまな視点からとらえることができ、また、日本が実名のままだイギリスの社会諷刺の材料につかわれるという、『ガリヴァー旅行記』以来の伝統(?)についても、あれこれ考えさせられた。

詳しくは別の機会にゆずりたいが、これは、ヴィクトリア期の日本像をめぐる文献的な研究のあいまに、私がおこなつたいくつかのフィールド・ワーク(?)のひとつとなつた。

## ヴァチカン図書館のこと

川 勝 義 雄

昨年十一月はじめから三カ月間、京大七十周年記念財団の援助によつて、ヨーロッパに将来された中国の古書・古文獻を調査するため、かの地の図書館をいくつか訪問することができた。その中で、ここではヴァチカン図書館のことを報告しておきたい。

その閲覧手続は予想外に簡単で、図書館に通ずる城門では例のスイス人衛兵のチェックがあるが、図書閲覧の希望をのべるとパスポートを点検するだけで図書館への通行証をくれる。図書館では門番氏が事務室へ行くと指示する。そこでは神父さんの事務長が必要書類に記入させ、閲覧者名簿に記帳させたあと、すぐ閲覧証を交付してくれる。それに貼りつけるべき小さな写真を実はもつていなかったのだが、次に来るときまでに自分で貼りつけておきなさいといつて、すぐ閲覧室に行くことを許してくれた。

ヴァチカン所蔵の中国書や文書を調べるには、まずフランスの有名なシナ学者P・ペリオが一九二三年に一カ月たらずここに籠つて作りあげた目録 *Inventaire sommaire des manuscrits et imprimés chinois de la Bibliothèque vaticane* を見るのが便利である。それは未刊原稿で、ここに一部備え付けてあるはずだが、参考図書棚になく、文書部の書庫の奥深くに置かれていることが分つて、まずそれを見せてもらつた。それは、ここにあるいくつかのコレクションごとの簡単な目録だが、その中で *Borgiano Chinese* と称する文庫には明板の古書が多い。張鼎思刊『史通』、万曆戊子武林張氏刊『論衡』、通志堂崇禎原刊『經典釈文』などのほか、研究所で見たことのない『韓子迂評』『諸子品節』などもあり、明板『閔尹子』(宋陳顯微解、元朱象先箋釈、明唐從梯輯評)には一葉ごとに白紙一葉を入れて綴じなおしたうえ、

そこにラテン語訳——ただし雑語のみの訳らしい——が記入されていた。

みごとな大理石をふんだんに使ったルネサンス様式の堂々たる閲覧室で、精板の古書を繙きながら、ときおり窓外の中庭の緑に疲れた目をいやすとき、眼福とはこういうものかとの実感を禁じえなかった。それにしても、ペリオがその目録に、稀観とか精板とか記すものの実物を見て、かれの鑑識眼の高さにあらためて驚いた。その中にペリオが明初刊本と記す『王子年拾遺記』を見ると、玄の字のほかに徴の字も欠筆になっている。あるいは宋板かと気になって、あとでフィルムをとりよせると、「これは漢魏叢書本のもと版か何かでつせ」と勝村君に軽くいなされた。ヴァチカンの魔力にゴマ化されたお笑い草であった。

## 夜行バス二十時間

園田英弘

真夜中の道を、ものすごいスピードで駆けぬけていく。道が白々と浮き上って見える以外は、すべて闇。道のはしばしに、時々、人がぼんやりと立っている。何をしているんだろうか。バリ島まで約二十時間のバスの旅だ。二食付、六千ルビで、約二千円の勘定となる。飛行機では、この十倍はかかるだろう。

バスの出発地ジャグジャカルタに着くのが遅れたので、ヒヤヒヤのしどろしどろだった。ジョクジャ(土地の人は皆こう言っている)から九十キロほどのところにあるスラカルタ(ソロと呼ぶのが一般的)みたいた。町の東端をブンガワ・ソロが流れている)の王宮を見に行つたのだが、帰路、バスのエンジンに鳥が飛び込み、動きがとれなくなつてしまったからだ。ベモという小型乗り合いバスみたいなものを乗り継いでやっと、出発に間に合った。

ジョクジャは京都に似た都市だ。古都である。中心にサルタン・パレスを配し、学生の町でもある。広場には夜店が並び、古本屋が軒を連ねている。専門書も多い。本のタイトルぐらいは、英語からの類推でわかる。

バスの中で出発を待っていると、乞食が集まつてきた。十人や二十人はいそだ。白い衣服が夜店の明りを背景に、黒くシルエツトをつくる。物売りのけたたましい声と対照的に、窓の外になにも言わず佇み、ただ手をさし出すだけ。そのままじっと、立ち去らずにいる。一人に金を与えようと、次のが来る。だんだん、しんどくなってくる。どのように対応したらいいのか。目をつむり、ひたすら出発を待つ。

スピードは百キロに近づいている。運転席のすぐ後の席だったので、メーターがよく見える。つぎはぎだらけのアスファルト道路。分離帯も、分離のためのセンター・ラインもない。車道・歩道の別もない。人・馬車・大型トラックが入り混っている。そこを百キロノ緊張の連続だ。

バスがターミナルみたいなところに止った。時刻は十二時になっている。乗り替え駅らしい。車掌が私に「下りろ」と言う。バ

スはバリ島直行便のはずだ。私はあわてた。「いや、バリ島まで行くんだ」と虎の子のインドネシア語で大声を出す。皆が笑った。「マカン、マカン」と繰り返して言われてわかった。食事時間らしい。バスのまわりには物売がひしめきあっている。大半が子供だ。騒々しい。食事はターミナルの売店に用意してあった。御飯とスープ。それに大きなエビセンみたいなものとトンガラシが付いている。スープを御飯にかけ、トンガラシをその上から塗りつける。胃が刺激され、うまい。

再びスタート。少しうつらうつらしてくる。スピード感にもなれてきたらしい。海のすぐそばを走っている。道の両側はヤシの木ばかりだ。ときどき、幹に白くペンキで塗ってある。何だろ。しばらくすると、その意味がわかった。道の両側のヤシの木の手前に、白い帯が描いてある。ヤシの林につつまないための標識だ。知らず知らずのうちに寝込んでいたらしい。肩をゆすられて目を覚ます。又、食事だ。午前四時。食欲があるわけがない。海辺の土産物屋風の店で、皆、食事を始めている。スープだけ飲み、海を眺める。「食べられないのか」と、突然、英語で話しかけられた。見ると若いのが二人、立っている。休暇で帰省中のバンドン工科大学の学生だと言う。身分証明書を見せてくれた。身分証明書を書きわき見せるのは、どうも、インドネシア人の癖らしい。頼みもしないのに、見せられたことが何度もある。何が書いてあるか全々わからない。二人は、B・T・Cという文字のついたTシャツを着ていた。制服ではないが、大学で売っているらしい。Bandung Technological College。京大のマッチや手紙を思い出す。夜が明けてきた。

昼近く、バリ島へ渡るフェリーに乗る。ジャワ島の方を見ると、富士山型の山が等間隔に三つ並び、なかなか壮観だ。船上で先の学生二人と話す。デンパサルまで帰るところらしい。「おい、物売の子供が日本語で何か言っているぞ」と一人が言った。私は、子供が何と言っているか全々わからない。首をかしげていると、「ちがう、あれはジャワ語みたいだ」ともう一人の方が文句をつけた。「アレハ日本語デナイコトヲ、私ハ保証スル」と言ったら、「ちがいない」と一同爆笑。

雨期が開けたのかもしれない。インドネシアで初めての晴天。目の前いっぱい、バリ島がひろがっていた。

## 冬の北京

竹内 実

雲のきれめを狙うようにして、飛行機が降下していくと、中国大陸の大地がせりあがってきた。洗濯板のすじめきながらに畑のうねがみえ、四角い建物や塀をつなぎあわせた聚落が早い速度でうしろへ飛んでいく。北京市の郊外だな、とおもっているあいだに、滑走路がみえ、飛行機はいつのまにか車輪を地上につけて情性の走りをつづけている。

機上から中国大陸の大地がせりあがってきたとき、わたしは驚

きと失望を感じたのだったが、それは冬の凍った空氣のしたで、土の色がどす黒く、まるで生氣がなかったからだった。中国の冬は、こんなものだったろうか。わたしはいそいで、自分のあたまのなかのアルバムをめくったが、しかし類似の景観はうかがいがつてこなかった。

あるいは、雪でも降っていて、一望千里、雪原がつづいていたら、すれば、まだしもわたしは興奮したのかも知れない。

夕食をとり、会議がおわったあと、わたしは宿舍の北京飯店から天安門までひとりで歩いてみた。九時をすぎたとおもうが、うすいオーバーを透して無数の針のような寒気がつき刺つてきた。出発まえ、『北京のひとり者』の校正に追われていたせいか、ゆきかう二人連れが、なにやら小説中の人物のようにみえる。

中学校をでたかでないかの年ごろの男女が、もつれあうようにして前方からくるのは、ちかごろの風俗なのである。ところどころにバス停があつて五、六人が待っているが、べつに見咎めるようでもない。天安門のまえの観覧席のうしろに、やや中年の男女がまわつていたので、好奇心もあつてあとからいつてみると、二人は手すりにもたれて堀を覗きこんでいた。わたしも覗いてみたが、泥がたまつていただけで、なんのへんてつもなかった。

天安門の両側に赤い高い塀がつづいているのは昔のままだったが、その塀に片手をあてながら、背の高い男がなにか話していた。女はうつむきながら聞いていて、自転車一台（どちらのものか）、これも塀にたてかけてある。塀と歩道のあいだは、まばらな林のように白楊が植えられているから、歩道から林をつきつて傍まで近づくというのは、いかにも傍若無人の行爲になる。防寒

帽の耳おおいをおろして白いマスクをし、緑色の厚い外套を着用しているの、かろうじて男か女の区別がつくだけである。

北京滞在中は、黒い霧のように、石炭の煙が街路にひろがり、快晴の日はわずかだった。室内にまで、鼻をさすような石炭の匂いがはいるこんできた。すぎさつた十九年の歳月にまるで実感がわかなかった。

ようやくわたしが自分の旅らしい気分をとりもどしたのは、上海にいつてからだった。

## 蘭州の印象

梅原 郁

高度を下げてゆつくり飛ぶ飛行機の窓からみると、黄色い山並みが人間の太脳のようなひだを持ちつつ果しなく拡げている。蘭州ノ私の専攻している宋代では西の最前線であり、今はやりのシルク・ロードの入口だったこの町は、乾燥と寒さの真只中にあつた。時折り雪が粉のように舞おり、塩をまいたように地面に凍りつく。飛行場から町まで二時間に近く、道の両側はアメリカの西部を思わせる荒涼たるアルカリ性の原野である。やがて黄河を渡る。予想に反して、川幅一杯に真青な水が滔々と流れている。

旧城内から小一時間のこの橋のあたりは大工業地帯。橋一面を黒

い煤が覆い、立っている瞬間にも黒い粉が降りそそいでくる。

蘭州の町が外国の参観団に開放されてからまだ日も浅く、我々が乗るマイクロバスが何と日本製ということも手伝って、人々の注目的になる。書店で車を停めれば見物で交通渋滞、ぶらりと市場に入れば、触りに来る人で身動きもままならぬ。ここも新しい都市作りのため城壁は取壊され、些か殺風景な大通りとかわっている。だが白い毛皮のコートを長く拽き、髻をのばしてこの大通りを満歩するチベット系民族の姿が、白く乾いた砂塵の中に浮き出ると、中原から遙か遠い町という実感が押しよせる。

この度の蘭州ゆきは、博物館関係の参観団の一員に加えていた。だいたこととて、甘肅省博物館で多くの時間をすごした。一九六〇年に旧城内から現在の場所に移された博物館は、まだ必ずしも十分に整備されているとはいえず、期待した彩陶も、一九七〇年から七七年まで、千カ所の発掘、三万点の文物の発見があったという割には、展示品は少なかった。

場所柄、博物館では、彩陶、漢簡、石窟芸術に主力を注いでいるといわれ、七二年から七六年、居延で発見された二万本の漢簡が整理研究されている由。我々も、すでに発表された「寇恩封事」をはじめ、当時のままの漢簡と附随する文物をま近かに見せて貰うことができた。このほか、有名な武威出土の踏奔馬と同じ墓から出たという青銅の美事な一角獣、馬家窑の素晴らしい彩陶なども、特に出してきて下さった。いまひとつ別に嘉峪関の彩画磚墓が博物館の別棟に復原されており、この磚は門外不出の本物ですよと館長の呉怡如氏が意味あり気に笑って説明されたのが印象深い。

蘭州から戻ると、冬とはいえ、さすがに長安の麦の緑、湿り気を帯びた空気は、我々の心身をなごませてくれるに十分だった。

## 入蜀雑感

狭間直樹

古の蜀の国、四川の地は、こどものころに吉川英治の三国志を読んでいた一度は行ってみたい地であった。今春、杜甫文学研究者代表团にくわわってその念願をはたすことができた。所内から吉川忠夫、深沢一幸の両氏も一緒だったが、さしずめぼくは読者代表といったところである。

入蜀の困難はつとに聞えるところだが、夜行で通りぬけての剣閣あたりの險峻はいささか想像を下まわるものだった。秦嶺を一夜にして越えた眼に映るものは、黒い土、碧い水、豊富な緑、いずれも、西安の友人がいったように、南国の風光だった。

天府の国の中心、成都については、草堂、武侯祠、森時彦氏の滞りする四川大学等、記すべきことが多いが、いまはただ人びとの人情に厚いことだけを記しておこう。

三峡の船旅は素晴らしいものだった。重慶武漢間二泊三日、うち奉節宜昌間の約二百キロを、朝七時に白帝城を仰ぎ、夕五時に南津関を過ぎるまで、途中に若干の寄港時間を費すといえ、一

日がかりで瞿塘、巫、西陵峽をつきぬけるのである。その絶景ぶりは写真などからするイメージとそう隔たつてはいなかったが、天然の造型の真只中に身をおいての迫真感、その場に臨んで体得するしかない。

雄偉險峻と評される瞿塘峽のもっとも狭いところはほ六十メートルと観じたが、数百ないし一キロの川幅が急にこれだけになるのである。そこで感じいつて、旅立ちまえに物の本で読んだ、三峽の水面は四川盆地よりも高くなっているとの話を披露したのだが、皆、水が高きにつくというようなことはありえない、と相手にしてくれなかった。しかし帰国後、友人の物理学者に質したところ、重力を上まわる水流があればそういうことは起るとの

一九七八年度の人文科学協会助成金は、次の三氏におくられた。

## 1 姜 在 彦 氏

姜在彦氏は、終始一貫、民間にあつて、朝鮮近代史、とくに朝鮮近代思想史の研究に従事して来られた。

この分野の研究は、長期にわたる日本帝國主義の支配によつて制約され、その資料も煙滅し、或いは煙滅せしめられてきた。姜氏は在野の研究者という困難な状況にあつたにもかかわらず、多年にわたつて、日

## おくりもの

裏付けをえたので、ばくはいまも三峽の方が高いと信じている。そして、長江後浪推前浪という句はあるいはもともとこのことに根ざすのではないかなども推測している。

それはともかく、今度の旅でもっとも驚いたのは、南津関を出たとたん、一望千里、見はるかすかぎりの平原が開けていたことである。突如たる急転、予期せぬ衝撃、あまりの対照に蜀の中原からの懸絶の様相がよけいに鮮明となった。三峽といくつかの棧道でのみ外界とむすばれた四川の地は、規模は比較にならぬにしろ、井岡山と同じ形だったのだと気付かせられると、そこから諸葛孔明と毛沢東の生涯へと連想はとび、沈みゆく夕日を見ながらしばし感慨にふけたものだった。

本の各地で資料を発掘・蒐集し、さらに、かつては陽の目をみなかったが、解放後の朝鮮（南北を含めて）の公刊または未公刊の資料や文集をも蒐集し、それらに基づいて、恐らく日本で前人未踏の分野を開拓して来られた。その研究成果は、逐次、『思想』『歴史学研究』『朝鮮史研究会論文集（年報）』等に発表され、その都度、学界の注目するところとなった。それらの論文は、『朝鮮近代史研究』（日本評論社）『近代朝鮮の変革思想』（同社）『朝鮮の攘夷と開化』（平凡社）『朝鮮の開化思想』（近刊、岩波書店）等にまとめられ、こんにち、朝

鮮近代史、とくに朝鮮近代思想史を研究しようとするものにとつて、必読の文献とされている。

朝鮮近代史は、中国近代史と並んで、東アジア近代史の重要な一分野を形成する。

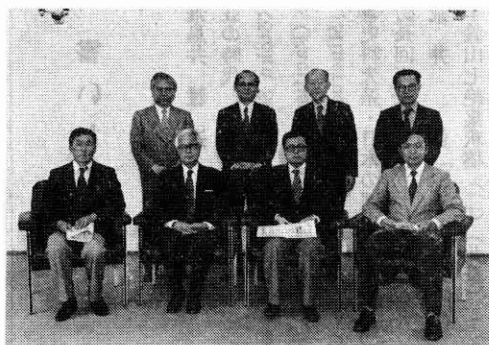
とくに日本近代とは不可分の関係を有し、この分野の研究なくしては、日本近代史の研究そのものも一面的にならざるを得ないといつても過言ではないであらう。近い将来、この分野の研究は、東洋史学および日本近代史学の発展のためにも、必ず盛んにならなければならないであらうし、また、そのように助成していかなければならない

であろう。

人文科学研究協会の助成金が、このような篤学真摯な民間の研究者に贈られることは、わが国において、ようやく始まったばかりの朝鮮近代史の研究にたいして、大きな励ましを与えることになるであろう。

## 2 中村公省氏

中村公省氏は現代評論社の編集者であり



ましたが、毛沢東の発言、論文を編集した、「毛沢東文化大革命を語る」をはじめとするシリーズを担当、これを完結しました（全6冊）。

その後、毛沢東の新中国成立以後の全著作の収集出版を志し、出版社を辞職、塾教師によって生計を支えつつ東京の各図書館・研究所を精力的に探訪し、ほぼ入手しうるかぎり入手を終えました。

いっぽう、毛沢東の全著作年表（一九四九～七六）も作成、ほぼ完成しようとしております。

また、その文献的作業をつうじ、毛沢東の思想の実証的研究にも着手、すでに発表したものもあります。人文科学研究協会助成金の趣旨にふさわしい人物と業績であると考えます。

## 3 宇野久夫氏

宇野久夫氏は、髪型の文化の在野の研究者である。髪型の実技者は星の数ほどいるが、その研究者は世界的にみても寥々たるものである。氏はほとんど独学でこの研究分野に進んできた学者である。

結髪（けつぱ）の習慣は人類の歴史とともに古く、

社会のファッションとともに新しい。なぜ人間がかくかくの髪をゆい、またゆわないのか——は、文化の領域の重要な問題の一つである。フレイザーの民俗学、ファースの人類学など髪型を扱った学問は少しながらある。それらの記述と、古典（日本、中国、西洋）にみられた言及とを丹念に洗いだし、髪型の宗教的・民俗の意味を氏はさぐりつつけている。同時に、近現代社会の髪型の変化のあとを歴史的にたどることによって、氏は社会学の新しい分野をもひらいた。古いものと新しいものとを総合的にとらえるというこの野心的な仕事の結果したものが『髪型の知性』（一九七八年、紀伊国屋書店刊）である。

宇野氏のまとまった論文としては、右の書がはじめてのものであるが、氏のこの分野における努力は十数年にわたってつづけられていた。右の歴史的、文献的研究のほかに、フィールドの調査のころも氏は行なっている。全国数カ所にわたって意味ありとみとめた大中都市でのファッションの街頭調査である。これはまだ活字にする段階には達していない。これを激励するのは、当を得たことと信じるものである。

# 書いたもの一覽

一九七八年十二月

一九七九年五月

(五十音順、●印は単行本)



・飛鳥井 雅道

狂の時代

ボイス 一二月

Kōtoku Shusui: His Socialism and Pacifism

(Pacifism in Japan, ed. by N. Ramba and J. H. Howes)

Minerva & British Columbia U. P.

十二月

●史料大系・日本の歴史(七・近代)

大阪書籍

一月

防長回天史の思想

人文学報

四七号

三月

・荒井 健

李義山七絶集稿(二)(共筆)

東方学報

五一冊

三月

・飯沼 二郎

対談・風土と農業(伊東光晴と)

(『日本の経済風土』)

日本評論社

十二月

●翻訳・大蔵永常『広益国産考』(現代語訳、訳註、解説)

(『日本農書全集』一四巻)

豊山漁村文化協会

十二月

座談会・大学研究室における在日朝鮮人の生活(日高六郎らと)

朝鮮人 一六号 一月

イエス・キリストの復活と私

聖書教育 四月号

東北地方の巡回を終えて 奥羽教区通信 一三三号 四月二〇日

農民の人間解放と日本農業の回復 農村伝道協議会報告 四月

イザヤとエレミヤ——正統と異端

共助 四・五月合併号

在日朝鮮人の「第三の道」

共同通信社系各紙

五月上旬

「農業白書」をしかる

読売新聞

五月一〇日

日本農業再生への道

エコノミスト

五月二九日

The Development of Japanese Plough in the First Half of the 20th Century Zinbun 一五号 三月

・上田 篤

文化と文明 中東旅行から

大阪大学工業会

一月

ユネスコでアジア的生活様式の研究

新建築

二月号

町家からタウンハウスへ——あるいはインサイド・アパート

メントの発想

新建築

三月号

竹

シミズブレティン

四四 三月

商都の条件

Chamber

四月号

なぜ御堂筋を歩行者に解放するのか

都市創造

二四 四月

・上山 春平

山城を歩いて考える——京都北白川城の場合

創造の世界

二九号

二月

記号論への道

人文学報

四七号 三月

元号と天皇

中央公論

五月号



・梅原 郁

●沈括・夢溪筆談(訳註) Ⅰ

平凡社 二月

●東京夢華錄夢粱錄等語彙索引

人文科学研究所 三月

・小野 和子

三八国際婦人デーによせて

日本と中国 二月二十五日号

・川勝 義雄

初期東晋政権の軍事的基礎(加賀博士退官記念中国文史哲学論集)

三月

・河野 健二

Matrices du républicanisme japonais

Zinbun 一五号 三月

●現代社会—転換期の考察

人文書院 四月

・桑山 正進

大理石ヒンドゥー像はヒンドゥー王朝のものか(補訂)(『アジア文化史論叢』二)

山川出版社

二月

仏像の創始

歴史と地理 二八一号 二月

唐代金銀器始源

Museum 三三七号 四月

Notes on the Introduction of Square Potium to the

Taxilian Stupas Orient: Report of the Society for

Near Eastern Studies in Japan X I V (1978) 五月

・阪上 孝

サンリシモニアンの経済学批判

人文学報 四七号 三月

・佐々木 克

維新政権の官僚と政治

人文学報 四七号 三月

・曾布川 寛

崑崙山と昇仙図

東方学報 五一冊 三月

・竹内 実

鄧小平訪日語録の研究

文芸春秋 一月号

中国をひらく力の行方

中央公論 二月号

●北京のひとり者(訳)

朝日新聞社 二月

三十年間苦闘の歴史(東京会議ノート)読売新聞

四月一六日

暗影としてのナショナリズム

中央公論 五月号

ドキュメント・天安門事件(書評)

週刊文春 五月三日

中国文芸茶話(二十一・二十四)

グラフィック茶道 連載

・多田 道太郎

●風俗学

筑摩書房 二月

ことわざの風景(『本』)

講談社 二月・四月(毎月)

ボードレール『悪の花』サバチエ詩篇評釈(共同)

人文学報 四六号 三月

●『いき』の構造を読む(共著)

朝日新聞社 三月

外から見た日本語(鶴見・山本編『抵抗と持続』)

世界思想社 四月

Japan: communication mores in places where people

gather Zinbun 一五号 三月

・田中 淡

●アンドリュ・ポイド『中国の建築と都市』(訳)

鹿島出版会 二月

●伊賀新大仏寺発掘調査報告書(共著)

新大仏寺 三月

伊賀新大仏寺の発掘調査

月刊文化財 四月

・田中峰雄

パリ大学の対修道者闘争とフランチェスコ会

人文学報 四七号 三月

・谷泰

◎E・ホール『文化を超えて』(共訳) TBSブリタニカ

三月

トランシルヴァニアの牧夫たち——牧夫—羊間関係行動

アニメ 四月号 三月

呼称選択行動の方法論的考察(谷泰編『人類学方法論の研究』)

京大人文研 三月

二重文脈状況におけるアンビヴァレンス(谷泰編『人類学方法

論の研究』)

京大人文研 三月

Posture Choice of the Japanese Today: ambivalence in a bi-cultural situation Zinbun 一五号 三月

習性と文化とのあいだ——南西ユーラシアの羊飼いを訪ねて——

季刊民族学 八号 四月

・富谷至

「儒教の国教化」と「儒学の官学化」

東洋史研究 三七巻四号 三月

・磯波護

唐書・旧五代史など(宋代書録) 香港中央大学出版社 一二月

・中村賢二郎

前近代ドイツにおける「楽師」について 人文学報 四七号 三月

・濱田正美

Bibliographie des travaux turcologiques japonais

Turica Tom.9/2-10 三月

L'Histoire de Hotan de Muhammad A'lam(1),

Zinbun 一五号 三月

・林已奈夫

先殷式の玉器文化

Museum 三三四号 一月

殷周青銅器銘文鑄造法に関する若干の問題

東方学報 五一冊 三月

・樋口謹一

住民自治の活性化を求めて——「地方の時代」への提言

公明 一月

・深沢一幸

李義山七絶集釈稿(二)(共訳) 東方学報 五一冊 三月

・福永光司

◎文庫版中国古典選『莊子』雑篇(下) 朝日新聞社 一二月

山上憶良と病氣——奈良朝期の道教医学

健康 一月

蘇秦と鬼谷先生と太公陰符(『全釈漢文大系』25月報)

三月

「本雜」の哲学

木雜 創刊号 三月

老子の「道」 NHKラジオ学校放送テキスト 四月

・古屋哲夫

第七五・八〇・八一議会展説(『帝國議會誌』第三七・三八・四三巻)

東洋文化社 七、八月、一月

「滿州事変」以後の対中国政策 人文学報 四七号 三月

・前川 和也

Animal and human castration in Sumer, Part I

Zinbun 一五号 三月

・松井 健

エスノ・サイエンスとフョーク・タクトソノミー——その方法論的諸問題——(谷泰編『人類学方法論の研究』) 三月

ブリコラージュ考——レヴィストロース『野生の思考』における自然と文化—— 人文学報 四七号 三月

アフガニスタンの遊牧民——ドゥラニ系パシュトゥ族の牧畜生活—— アニマ 七巻五号 五月号

・見市 雅俊

女性メシアとスエズ運河 人文学報 四七号 三月

・御牧 克己

Blo gsal gnib mtha' について 密教学 一五号 二月

Mi phamの『智心髓集』注

印度学仏教学研究 二七巻 一号 二月

Le chapitre du Blo gsal gnib mtha' sur les Sautrantika

Zinbun 一五号 三月

・森 時彦

フランス勤工儉学運動小史(下) 東方学報 五一冊 三月

・柳田 聖山

今月のことば 花園 二月—五月

禅語コーナー

將軍脱出—中世漂泊・その五 禅文化 九一号 二月

鼎談・詩の演出者—狂雲集虚実・その二(加藤周一・ソニヤ・ノストランド)、『日本の禅語録』(月報)

中外日報 一月三日号

林野可抄 一休の「私」 京都新聞 一月一日号

晩年の道元 京大新聞 一月二六日号

秘すれば花なり秘せずば花なるべからず 宗教 二〇四・五号 三月

同朋 三七三号 五月

山下 正男

何がヨーロッパ文明をつくったか——羊と山羊の文化史

アニマ 一月号

数における市民権の拡大運動 Basic 数学 三月号

論理学史におけるヘーゲル弁証法の位置 人文学報 四七号 三月

山田 慶児

広重徹の仕事(広重徹『近代科学再考』解説) 朝日新聞社 二月

伝統的哲学の思考法—その可能性と限界 東洋学術研究 一八巻二号 三月

The Formation of the Huang-ti Nei-ching Acta Asiatica 三六号 三月

横山 俊夫

Tourism, Dandyism, and Occultism ; quest for national identity in the nineteenth-century Japan

Proceedings of the British Association for

Japanese Studies, vol. IV, University of Sheffield 一月

'This Singular Country': Victorian Perceptions of Japan  
in the 1860's Zimbun 一五号 三月

・吉川 忠夫

顔師古の『漢書』注

東方学報 五一冊 三月

裴駰の『史記集解』(『加賀博士退官記念中国文史哲学論集』)

三月

・吉田 光邦

茶の湯の工芸

淡交 一月

室内室外

室内 一ノ三 五月

文化

セラミックス 一月

近世農業指導者の林業観

林業技術 一月

訓蒙の意識

天地 二月

勅題菓子

京のれん 二月

中国現代化の素顔

正論 一二―二月

松の信仰といけばな

いけばな公論 三月

●田沼意次

平凡社 三月

Colour

Zimbun 一五号 三月

The Chinese Concept of Technology Acta Asiatica 三月

Cratis and Tradition

WCC 78 Kyoto 三月

むかしの看板

東洋インキニュース 三月

●伝統的工芸品産業の問題

きものと装い 四月

つむぎ(続)

織部焼の文様

茶道雑誌 五月

大阪弁

大阪人 三、四、五月

ト占の史的展開

日本及日本人 五月

イランの橋

山河計画 五月

明治における技術移転

鉄 五月

耽書つれづれ

同朋 五月

詩仙堂庭園

探訪日本の庭 五月

序にかえて

皆山泰蔵ろう染の世界 五月

コラム

日経ビジネス 二、三、四月

追悼八木一夫

六月風 五月

工芸史散策

華道 一二―五月

染織さまさま

染織マンスリー 一二―三月

書評・「筆」

朝日ジャーナル 二月

・渡部 徹

●昭和五二年度京都市同和地区住民生活実態把握事業実施報告

書(解説編) 京都市民生局同和对策室 三月

刊行によせて(『京都地方労働者教育史』序文)

京都勤労者学園 三月

全国水平社解消論と部落委員会

人文学報 四七号 三月

神山茂夫著作および所蔵資料の保管・閲覧について

神山茂夫研究 六号 四月

書評・ヘンリー・スミス「新人会の研究」

朝日ジャーナル 五月四日号

書評・「日本社会運動人名辞典」

週刊読書人 五月一四日

(一二ページより)

○松田 清助手(西洋部)は、高知大学助教授(人文学部)に昇任。

○会田雄次教授(西洋部)は、停年退官。

○福永光司東京大学教授(文学部)を当研究所教授(東方部)に配置換(以上四月一日付)

○天野史郎氏を助手(西洋部)に採用(五月一日付)

○荒井 健教授(東方部)は、五四年五月七日伊丹発、京都学術代表団の一員として、北京大学、西安大学、故宫博物館等で、中国文学に関する研究調査を終え、同年五月二七日帰国。

人

文

第二〇号

昭和五十四年九月十日

京都大学人文科学研究所発行

博文堂印刷

非売品